

本日はエルサレムから宗教指導者たちがイエス様のもとに来てイエスという男性が何を教え行っているのかを確かめに来たが、イエス様は反対に彼らの信仰が偽りである事を明らかにされる箇所。

I. 律法主義者たちの問い (1-5)

これまでイエス様が成されてきた数々の御業の噂が広まり、エルサレムの宗教指導者たち（パリサイ人と律法学者たち）の耳にも入り、彼らはイエス様のもとに集まった。彼らは各地の諸問題に対して取締りや指導を行っていた。以前にも一度イエス様に対して律法学者を派遣していた（3:22）。今回は前回よりも多くの指導者たちを派遣しており、イエス様の事を警戒していた事が分かる。彼らがイエス様の所に来た理由は何か？イエス様の欠点を探し、告発するために来た。すると彼らはイエス様の弟子のうちのある者たちが手を洗わずに汚れた手でパンを食べているのを目撃し、指摘する。宗教指導者たちの「洗っていない手」とは衛生上の問題ではなく、ユダヤ教で厳しく守られてきた「きよめの儀式」（旧約時代、いけにえをささげる前に手と足を洗いきよめてから天幕の働きをするようにという祭司に対する戒め）を踏まえての指摘であり、手や体をきよめてから食事をするようにという規定を作っていた。パリサイ人や律法学者はこの規定を拡大解釈し、市場に行き、知らないうちに体のどこかにでも異邦人に触れていたら汚れた者であると考え、他の人にも食事の時に手や体をきよめてから食事をするよう求めていた。彼らは他にもこのような数多くの独自の言い伝え、慣わし（聖書の戒めを曲げて解釈したもの）を守り行い、それを人に押し付けていた。彼らの言い伝えは、最初は聖書の理解を補足するものだったが、次第に拡大解釈され、聖書と同等、または聖書に代わるものとなっていた。パリサイ人、律法学者達はいつの間にか自分達の在り方、考え方が絶対的なものとなっていた。そのためイエス様を正しく見極めることができなかった。彼らは自分達が得意としたり、守れる又は守りたいとする教えを新たに作り、それを守れない人を裁いていた。それは他の人よりも自分が優れていると思わせるためであったり、また自分の汚れを隠すため。この事を律法主義と言う。自分を人よりも優位な立場に身を置きたい、自分の劣っている部分を見せたくないという思いから、自分が守れる基準を作り、他の人にもそれを当てはめ裁こうとする。パリサイ人、律法学者達はその基準に合わない者、合わせない者を裁き、除け者にしていく。

パリサイ人と律法学者達が「**なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えによって歩まず、汚れた手でパンを食べるのですか。**」（5）とイエス様に尋ねた事はまさにイエス様を裁き、自分達の汚れを隠し、自分達が最も正しい義人である事を示そうとしているということ。

II. イエス様の答え (6-13)

イエス様はパリサイ人と律法学者達に対して、旧約聖書のイザヤ書を引用されて彼らの偽善をあらわにされる。「**イザヤは、あなたがた偽善者について見事に預言し、こう書いています。『この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを礼拝しても、むなし。人間の命令を、教えとして教えるのだから。』**」（6-7）

イザヤの旧約時代のユダヤ教の指導者は儀式や律法、口伝律法を守り行う事で神を崇め、自分達が全き正しい者であるかのように振る舞っていた。イエス様は彼らと同じ間違いを犯しているパリサイ人と律法学者達に、はっきりと「**あなたがたは神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守り……自分たちの言い伝えを保つために、見事に神の戒めをないがしろにしています**」（8-9）さらに、「**父と母を敬え、また父と母をののしる者は、必ず殺されなければならない**」（10）と言われた。これは神がモーセを通して私たち人間に与えられた大切な戒めの一つで、人が作った教えではなく、神から私たちへの戒め、命令であるとイエス様は引用され言われました。

そして続けて言われます。「**それなのに、あなたがたは、『もし人が、父または母に向かって、私からあなたに差し上げるはずの物は、コルバン（すなわち、ささげ物）です、と言うなら——』**と言って、その人が、父または母のために、何もしないようにさせています。」（11-12）と。

このコルバン（ヘブル語：ささげ物、献金）は一度神にささげると誓うならばそれは「聖なるもの」となり、たとえ両親の扶養のためであっても用いることを禁じる言い伝えをユダヤ教の指導者たちが作った。

そのコルバンの制度を利用して、大切に育ててくれた両親の必要に目も留めず、世話もせず、扶養家族である年老いた両親のための生活費をコルバン（神に献金する）とし、経費としての出費を抑えて

いる者が出てきた。両親の生活費を削って、献金に流用する名目で着服し、それをあたかも自分達が信仰深いように正当化して見せていた。つまりこの言い伝えは扶養義務を怠る人を作り出した。けれどもパリサイ人、律法学者達はそれでも清いと思い込み、いつか捧げるなら良いという主張。しかしこの場合は両親に対して成すべき責任を逃れるための口実としてコルバンの誓いがされており、聖書の誓いの精神には反しているため無効であり、悔い改め、両親に対する責任をなさなければならなかった。イエス様は彼らのその汚れを見抜き、イザヤ書を引用して彼らの罪を示された。イエス様はさらに言われます。「このようにしてあなたがたは、自分たちに伝えられた言い伝えによって、神のことは無にしています。そして、これと同じようなことを、たくさん行っているのです。」(13) 一見するとパリサイ人、律法学者達はみことばに従っているように見えるが彼らは神のことは無にしていた。つまり神が喜ばれない歩みをしていた事をイエス様は指摘したということ。律法主義は人の汚れを隠すが、神の戒めは人の汚れをあらわにする。自分の汚れを隠し続けるなら、いずれその刈り取りをすることになる。

私たちは、神のみことばを聞きたくないと思ふ葛藤する中でも神のみことばに聞く事を選ぶなら、私たちの心の汚れを神は示してくださる。示された時には神に告白し赦しを頂きましょう。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」(1ヨハネ 1:9)

III. 人から出て来るものが、人を汚す (14-23)

「イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。『みな、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい。外から入って、人を汚すことのできるものは何もありません。人の中から出て来るものが、人を汚すのです。イエスが群衆を離れて家に入られると、弟子たちは、このたとえについて尋ねた。』(14-17) 並行記事のマタイを見ると、「パリサイ人たちがおことばを聞いて腹を立てたのをご存じですか。」(マタイ 15:21) とここで弟子たちはイエス様に言っている。なぜなら弟子たちはイエス様が宗教指導者の人達を強く批難したことによって、何か大変な事態になるのではないかと不安と恐れを抱いていたため。弟子たちは今なお、心が頑なで、さらに宗教指導者達を恐れていたためにイエス様の言われた事を悟る事ができずにいた。そのため、弟子たちは群衆がいなくなってからイエス様にたとえについて尋ねた。そのような弟子たちに対してイエス様は次のように言われた。

「『あなたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか。分からないのですか。外から人に入ってくるどんなものも、人を汚すことはできません。それは人の心には入らず、腹に入り排泄されます。』こうしてイエスは、すべての食物をきよいとされた。イエスはまた言われた。「人から出て来るもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側(罪人である人間の心、考え、思い)から出て来て、人を汚す(自分と他人を汚す、悪影響を与える)のです。」(18-23) この世の全ての物は本質的には汚れているのではなく、人の心が罪によって汚されていて、それが人や自分を汚し、この世の全てのものを自分の欲望のために使う。それが汚れ。外側のものを綺麗にしてもそれは本当の清さではなく、内側のもの、心が清められる必要があるという事をイエス様は言われているということ。

パリサイ人と律法学者達は、自分達は正しく自分達の基準に合わない人達を汚れていると見下していた。彼らはイエス様の教えに聞く耳を持たないばかりか逆に自分達の事を批難してきた事に対して憤り、イエス様を悪者に仕立て上げようとしていく。自分達の汚れを隠すため、神の戒めよりも自分達の都合の良いように規則を守り、また人々に強いていた。

イエス様は同じような過ちを弟子達が犯さないようにこれらの事を話し、悟るように言われた。汚れが清められるためにはイエス様を信じる事。そして神のみこころを歩むためには信じる時に与えられる御霊によって内側から新たに造り変えられ(御霊の実、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制が与えられ)主のように変えられ続けること。私たちの力ではできません。だから私たちはいつも主により頼み歩ませて頂きましょう。

先に救われ御霊に導かれる私たちは、いつも自分の愛の無さ、罪を示され、悔い改めて、神に立ち返り、神の愛の恵みに感謝し、神と隣人を愛する人、主の似姿に変えられ続ける。なんとという恵み! その恵みに生きる者として主の救いの素晴らしさを御霊に導かれて御霊の実を表しつつ、私たちの愛する人たちに福音を宣べ伝えて行く者とされてまいりましょう。